



た。本校からは現在まで一人の感染症や食中毒者も出していない。

②ともに過ごす者としての共感

避難所には『避難者自治』という概念も生まれた。「毎日頑張っている先生方の姿を見て、私たちもそれぞれ出来ることをやろう。」という避難所リーダーの声かけから始まった。自分たちで避難所の環境美化（清掃やトイレの管理、花植えなど）を自主的に実施していただいている。また、生活をともにするものとしての意識の変化もある。お互いの体調を気遣う言動が頻繁に交わされ、よい雰囲気は避難所全体を包んでいる。

③ 支援していただいた方々

① 支援していただいた気持ちを無駄にしない

本校では、基本的に支援の申し出を有り難く受け入れる。避難所間をたらい回しにされたという訴えを聞くこともあった。『気持ちを無駄にしない』という井手文雄校長の方針のもと、支援物資の「搬入」から「保管」、「活用」までを一連の流れとしてとらえ、今必要なものは避難されている方々が自由に受け取れるようにした。（数量制限などは行わず必要な方に必要な分を渡すことを原則とした。）



支援者へのお礼状

② 互いが気持ちのよい支援の受け方

「ここに来てくださってありがとう」という気持ちを支援者に伝えることは、支援物資や支援活動を受けるときに重要なことである。もちろん支援物資を有効活用することがお気持ちに応える一番であることは十分承知しているが、本校に来ていただいたその事実について感謝し、その意を少しでもお伝えるため、『ご支援をいただいた皆様へ（御礼）』を毎回手渡している。

3 現在

避難所は落ち着きつつある。避難所になっている体育館にはプライベート空間を確保するためのパーティション（仕切り）が設置され、心理的の圧迫が大幅に改善された。月に一回、避難者と役場、学校が参加する運営会も開かれるようになった。そこで、それぞれ意見交換を行い、避難生活の向上などについて話し合いがもたれている。また、避難されている方々による家庭科室を利用した『料理教室』なども開催されている。

4 未来（最後に）

避難所が開設されて1週間ほどが経過した4月20日に、避難児童の中から『にこにこボランティア』（通称：にこボラ）と呼ばれる組織が立ち上がった。「自分たちに出来ること



PTA主催「ビアパーティー」

は何かないか。」「自分たちもみんなのための行動したい。」「感謝の気持ちを伝えたい。」そういった子どもたちが身近なボランティア活動や壁新聞作成を行った。この取組は大きな話題となり、新聞、テレビでも報道された。苦しさやつらさを知るものこそが真に寄り添い、共感していくという姿を子どもから学んだ出来事であった。きっと、今後（遠い将来かも知れぬ）支援する立場になったときには、こういった経験や行動が生きていくのだと感じる。

また、来年3月23日には本校卒業式が举行される。その中で、避難された方々や支援していただいた方々を招待し、全員で合唱しようという計画がある。どのような気持ちで歌われ、どのような気持ちで児童・職員はそれを聞くのであろうか。

確かに大きな災害に飲み込まれ、たくさんのもをなくし、身も心も疲弊しながら歩んだ数ヶ月ではある。しかし、その中でも善意の優しさや思いを受け、同じ時（場所）を生きる『人』として共感し、児童の成長も実感できた日々であった。

今現在も体育館、特別教室で約200名（6月30日現在）の方々が避難生活を続けられている。体育学習の場が制限されるなど不自由な学校生活は現実である。しかし、不自由な中でも工夫し、学校生活をより豊かにしていこうと日々、子どもたちと向き合う毎日である。（水泳学習の前倒しや音楽コンサート、創作活動の実施など）

最後に避難されている方から、ある時かけていただいた言葉を添えてこの拙稿を閉じたい。

「子どもと話すことが増えたんですよ。今までよりずっと。この子を守っていきます。子どもも私も、この避難所が大好きなんです。ここでよかった。先生、今日も頑張りましょう。」

きっと未来に希望は広がっていく。